

清流

題字：芳野 充

令和2年11月30日
第47号

発行所 加来不動産(株)
発行者 加来 寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

内に誠あれば外にあらわる

自身の品性が高まっているかを量る「二十の徳目」の四番目は、「誠実」です。素心学塾塾長の池田繁美先生は、この「誠実」のことを、「まじめでウソがなく正直であること」とおっしゃっています。しかしこの言葉にあまりピンとこなかったわたしは、自分なりに調べてみて、「なるほど」と感じたことをご紹介したいと思います。

「誠実」を辞書で調べると、「私利私欲をまじえず、真心をもって人や物事に対すること」とありました。「誠実」の「誠」という漢字の訓読みは「まこと」で、意味は「偽りのない心」となります。「誠」の字をさらに分解すると「言」と「成」にわけられ、「成」は固めるという意味をふくむため、「言うことを固める」。つまり、「自分の言葉を守って、動くことのない心」をあらわしていると知りました。

また「誠実」の「実」という漢字は、訓読みでは「み・みのる・まこと・げに」です。意味は、「中身がいっぱいある・内容・草木の実・まこと・ほんとうの・ありのままの」となります。「実」は、果実などの物質的な意味と、まことやありのままなど人の内面の意味をあらわしています。

ここまでできてようやく、辞書で書かれた意味に納得し、またその意味をかみくだいた説明が、池田繁美先生のおっしゃる「誠実」とは、「まじめでウソがなく正直であること」だと、腹落ちしました。

この言葉にわたしを当てはめて考えると、以前にくらべるとすこしはまじめになった気がします。しかし、自分都合の方便をつかいます。気づけば私利私欲でうごいていることも多々あります。ぜんぜんなっていないと落胆してしまいますが、これがウソ偽りない、いまのわたしだと思えます。こんなにもできていないわたしですが、決して卑下しているわけではありません。できていない自分をごまかさず、あたたかく受け入れていくつもりです。それは、完璧な人などこの世にいないという思いと、今後も人格を高めるための行動を、あきらめずにコツコツ続けていくことを決めているからです。

「内に誠あれば外にあらわる」ということわざがありますが、いまはまだ誠実さが外にあらわれるに至っていないと思います。しかし、先の未来では、わたしと面識のない第三者が対面した際、「この人はとても誠実そうなんだ」と思ってもらえるよう、陰日なたのない言動を心がけたいと思います。

加来 寛

